

令和 2 年 5 月 19 日現在

機関番号：32651

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K19179

研究課題名(和文)問題基盤型学習を用いたプライマリケア医・家庭医への意識変容の検証

研究課題名(英文)The changes in learners' consciousness about primary care during "Family Medicine Brush-up Program"

研究代表者

関 正康 (Seki, Masayasu)

東京慈恵会医科大学・医学部・助教

研究者番号：00532227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：我々は、プライマリケアに必要な能力を習得するための「家庭医療ブラッシュアッププログラム」を設計した。その第1期生を対象にフォーカスグループインタビューを行い、受講者のニーズや受講による行動変容が明らかになった。ニーズについては、プライマリケア医への転向に関する標準的な教育プログラムなく、プライマリケアに関する卒前卒後教育や生涯学修が十分でないことが明らかになった。受講者の変容については、行動への自信、思考方法の変化、プレゼンテーション能力の向上、自らの立場の変化の自覚、に分類でき、自信や自覚、能力の向上には、多様な参加メンバーと寛容な討議環境が基になることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プログラムは、異なる現場・専門分野の医師同士が討議し、プライマリケアの実践に必要な家庭医療に関する諸問題を問題解決型に学習するものである。我が国の医師の生涯学習において、医師個人が知識を重点的に学習するプログラムは存在するが、医師同士が協同して問題解決型で学習するものは稀である。本研究でプログラムのニーズと受講後の行動の変容が明らかになった。それにより、さらなる自己学習への貢献、診療の質の向上、そして診療を受ける患者のQOLの向上につながると期待できる。さらに、受講した医師がそれぞれの地域で診療・生涯学習を継続し、質の高い診療の実践や地域における生涯学習のリーダーとなることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：We have designed a new Family Medicine Brush-up Program, which is an interactive program on primary care aimed at primary care physicians, using a problem-based learning approach. Focus group interviews were conducted at the beginning and end of the program. The interview clarified the needs for the program and the behavioral changes of the participants. About the needs, the interview clarified there is a lack of standard re-education programs for primary care physicians. there is insufficient training on primary care in undergraduate and postgraduate medical education in Japan. continuing professional development programs should cover the communication skills, attitudes, and behaviors necessary for primary care practice. About the behavioral changes, The contents of the interview could be classified into self-confidence in behavior, change in thinking method, improvement in presentation skills, and awareness of change in one's position.

研究分野：総合診療

キーワード：プライマリケア 総合診療 家庭医療 生涯学修 problem-based learning

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来から医師はそれぞれが専門分野を持ち、その分野を中心とした診療に従事していたといえる。同時に、自らの医療水準を維持するため、継続的に研鑽してきた。その中には医師が学習する方法として、医師会が行うもの、学会が行う専門医の資格認定や更新で行うもの、そして研究活動、文献閲覧、論文執筆、学会発表等の自己学習で行うものの3つがあった。医師会に関するものは、平成4年に日本医師会により生涯教育カリキュラムが策定された。医学的課題と医療的課題の2つが柱であった。学会に関するものは、各学会それぞれが認定・専門医制度を設けた。その資格認定を目指すことによって、医師としての能力の維持と向上が図られてきた。医師は自らの医療水準を維持・向上させるために、そういった機会へ赴く一方で、そういった学会や研究会は事前に定められたテーマがあり、講義を聴き学習する受動的な形式であった。(橋本信也・医師の生涯教育の現状と今後の課題・医学教育39巻1号2008年)従前の生涯学習についてまとめると、

- ) 学習する内容は疾病の原因・診断・治療という知識面に重き
- ) テーマの決められた講義の受講や書籍の閲覧といった受動的な個人学習

と言えるであろう。

超高齢社会となり、一人の患者が多数の疾病を有する multimorbidity、さらに生物医学的な問題だけでなく、心理・社会的な問題を併せもった complexity を考慮しての診療が必須となってきた。すなわち臓器別専門医がプライマリケア医となった場合、必ずしも専門ではない医学的分野に直面し、さらに心理・社会的なニーズに対応することも求められる。その場合、自らが問題点を発見し、解決する能力が不可欠である。そのうえ、医学知識は爆発的に増加している。患者サービスおよび社会的要求に応えるだけの最新の知識・技能・態度を受動的に更新続けることは困難である。そのため、事前に定められた学習テーマを選択して、講義を受けることで教わるという受動的な学習では知識・技能の獲得は不足、各医師のニーズは十分に満たされなくなっている。実際、学習方法は従来の学会や講演会出席、あるいは書籍閲覧といった受動的なものから、病診や診診連携や実技研修、研修医や学生への指導など参加型学習が多く取り入れられている。現在の生涯学習に求められることについてまとめると、

- ) 受動的に知識を享受するのではなく、能動的に参加型に問題点を抽出する
- ) 抽出した課題を学習し、診療現場に還元する

と考えられる。(田中丈夫ら・医師の生涯教育制度・医学教育42巻4号2011年)

### 2. 研究の目的

上述のように、超高齢社会を迎えるにあたり、医師にはプライマリケア医として幅広い領域の診療が求められており、総合診療医・家庭医の育成は急務である。専門医制度の改革が進行中であるが、その一方で臓器別専門医としてすでに医療の経験があるベテランの医師をプライマリケア医として育成するシステムは充分とはいえない。そこで、彼らが地域でプライマリケア医あるいは家庭医として診療する上で必要となる能力について、problem-based learning(問題基盤型学習)形式の生涯学習プログラムを設計した。本研究は、このプログラムを実施し、プライマリケアに従事する医師たちのニーズに合致したものが、どのような学習成果が得られるのか、プログラムの効果を検証するものである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 家庭医療ブラッシュアッププログラムについて

家庭医療ブラッシュアッププログラムは、平成25年度文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業「卒前から生涯学習に亘る総合診療能力開発-地域における臨床研究の推進を目指して-」の一環として構築された。プライマリケア外来における代表的な健康問題(図1)をテーマに、家庭医療専門医が作成したケースシナリオについて、その問題点抽出のグループ討議を行うものである。各メンバーはテーマを1つ決め次回の発表に向け学習する。次の回で参加者は前回抽出した問題点の学習成果発表と討議を行う。運営担当は当該シナリオライターとともにファシリテーターとなる。また、閉鎖されたSNSグループを設定し、学習期間にグループメンバーやチューターと議論する。本プログラムの目標は、以下(図1)3つの能力を学習することである。また、能力の 1 に列挙した各健康問題についてシナリオを作成した。

図1:

- ・プライマリケア外来における代表的な健康問題に対処する能力  
小児診療～青壮年のケア～高齢者のケア 終末期のケア 女性の健康問題 リハビリテーション メンタルヘルス ワクチン 漢方 診療所救急 臓器別(筋骨格系・外科・眼科・耳鼻咽喉科)
- ・家庭医療のプリンシパルの理解とそれに基づく実践能力  
患者中心の医療の方法 家族志向性ケア 生物心理社会モデル 多職種連携 ヘルスP

ロモーションと疾病予防 医療倫理 患者医師関係・医療の文脈性と継続性 行動変容  
複雑性・不確実性へのアプローチ 省察的学習  
・コミュニケーションと外来診療の構造化への理解  
コミュニケーションと病歴聴取 診療所における検査 臨床問題解決 EBM 診療ガイド  
ライン プロフェッショナリズム マイノリティと社会的弱者へのアプローチ 自施設  
管理運営

本研究は、東京慈恵会医科大学倫理委員会にて承認を受けている（27-277(8162)）。本プログラムの第1期生を対象として下記の方法の研究を行った。

#### （2）プログラム開始時フォーカスグループインタビュー

本プログラムの初回開始時に、参加した7名の受講生を対象に、どのような学習ニーズを持っているのかについて、フォーカスグループインタビューを行った。

#### （3）学習項目に関する検証

第9回までの学習課題の発表と討議について、本プログラムで用いたケースシナリオが、学習項目にとって適切なものであるかを検証した。ケースシナリオ毎にシナリオ作成者が設定した学習項目と、その一方で各受講者が全体討議前にケースシナリオを読み、学ぶことができるとした学習項目をそれぞれ列挙し、その相違について比較検討した。また、ケースシナリオの討議で抽出された問題点を、共同研究者と協議し各学習項目の領域に分類し、その内訳について検討した。そして、用いたケースシナリオや問題点抽出に関する自由記載のアンケートを実施した。

#### （4）プログラム修了時フォーカスグループインタビュー

プログラム受講後の受講生に生じた意識変容について検討するために、修了した8名の医師を対象にフォーカスグループインタビューを行った。主に Kirkpatrick の4段階評価法のレベル2から4に相当する記録を抽出し、Steps for Coding and Theorization (SCAT) の手順に則りテーマ・構成概念を立て、それを元にカテゴリーに分類した。研究実施者と研究協力者2名のそれぞれが独立してカテゴリー分類を行った。一致しなかった点は3名間で協議し、分類先を決定した。

### 4. 研究成果

#### （1）プログラム開始時フォーカスグループインタビュー

発表：Seki M, Fujinuma Y, Matsushima M, Joki T, Okonogi H, Miura Y, and Ohno I. How a problem-based learning approach could help Japanese primary care physicians: a qualitative study. *Int J Med Educ* 2019; 10: 232-40.

受講者の持つ本プログラムへのニーズとして、以下3つの主要なテーマが得られた。第一に、臓器別専門分野からプライマリケアに移行する医師を対象とした、標準的な再教育プログラムが不足していることが挙げられた。第二は、日本の大学院医学教育および大学院医学教育におけるプライマリケアに関するトレーニングが不十分であることだった。第三は、生涯学習プログラムは、プライマリケアの実践に必要なコミュニケーションスキル、態度、行動をカバーする必要があることであった。

今後もプログラムを運営する中で、プライマリケア医のニーズを満たすかどうかを確認する必要がある。更なる研究として、プログラムの受講者がどのようなことを学んだか、そしてこの学習の結果として彼らの実践にどのような変更が加えられたかを検討する必要がある。プライマリケアやその他の領域において、多くの医師のための再教育プログラムの必要性を調査し、医学部および大学院の医学教育におけるこれらの能力に焦点を当てたプライマリケア再教育の重要性を強調する必要があると考えた。

#### （2）学習項目に関する検証

発表：関正康，藤沼康樹，松島雅人・他。「家庭医療ブラッシュアッププログラム」受講者の学習項目の検証．第49回日本医学教育学会大会．札幌．2017年

個々の討議の際に受講者から自由記載のアンケートをとり、以下のコメントがあった。

- ・家庭医療のプリンシプル等に関することを毎回指定課題として学習・発表する方針は良い。
- ・多くのことを学べている。ケース一つ一つから学ぶことは多い。
- ・Patient-Centered Clinical Methods をどのように臨床にいかせるかの議論をしたい。
- ・学習課題について検索する方法も、成果発表に交えることは良い。
- ・チューターとの間で、メールやeポートフォリオ上でもっとやりとりができると良い。
- ・学習成果発表は、参加者が司会やタイムキーパーをするのはどうか。

また、各参加者が当該シナリオから学べると考えた、コンピテンスの順位付けの分布を検討し、シナリオテーマが狭く特異的な回の方が、広いテーマの回に比し、順位付けが一致しやすい可能性が示唆された。さらに、シナリオを討議し抽出された学習課題をコンピテンスごとに分類しそ

の検討を行った。シナリオ作成者が意図したコンピテンスに含まれる学習課題は抽出されていること、各参加者が発表する学習課題の決定は、それぞれの関心やニーズに影響されている可能性が示唆された。

総じて、家庭医療のプリンシプル等は学習課題に設定しにくい傾向や、シナリオ毎に指定課題を設定しているが、学習方法に更なる工夫が求められる結果であった。これらのことを踏まえ、プログラムの継続運営をした。

### (3) プログラム修了時フォーカスグループインタビュー

発表：関正康，藤沼康樹，松島雅人・他。「家庭医療ブラッシュアッププログラム」受講者の意識変容の検証．第51回日本医学教育学会大会．京都．2019年

Kirkpatrickのレベル2から4に相当するカテゴリー分類は以下の結果だった。

#### 【レベル2：態度や気付きの変化 知識や技術の習得】

- ・プレゼンテーション・学習手法・調査手法の向上
- ・多様な立場や価値観との出会い・孤独が解消
- ・自らの立場の変化の自覚

#### 【レベル3：行動の変化】

- ・自信をもった行動：多様なメンバーとの討議 ジャッジされない討議雰囲気
- ・思考方法の変化：事象について根拠をもって言語化や一般化を図る

#### 【レベル4：組織での実践の変化 患者・クライアントの恩恵】

- ・診療スタッフの自発的な学びの促進

参加者が習得したと感じる内容は、家庭医療の個々の項目と異なる事柄もみられ、プログラムの目標との整合性を検討し運営する必要がある。「孤独」「多様性」「自信」というワードがあげられた。これらは、医院の開業等個人で診療をしている場合はさらに実感することが多い可能性はある。生涯学習をどのような方法で行うか、このワードをふまえて構築していく必要性が示唆された。診療スタッフの自発的な学びの促進（レベル4）とあるように、本プログラムのような生涯学習プログラムが、参加者のみならず周囲スタッフの生涯学習にも変化を与える可能性がある。実際の診療内容にどのような変化が生じるか、患者への提供する医療の質の向上につながるか、が今後の検討課題であると考えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>Seki Masayasu, Fujinuma Yasuki, Matsushima Masato, Joki Tatsuhiro, Okonogi Hideo, Miura Yasuhiko, Ohno Iwao | 4. 巻<br>10              |
| 2. 論文標題<br>How a problem-based learning approach could help Japanese primary care physicians: a qualitative study     | 5. 発行年<br>2019年         |
| 3. 雑誌名<br>International Journal of Medical Education  | 6. 最初と最後の頁<br>232 ~ 240 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.5116/ijme.5de7.99c7   | 査読の有無<br>有              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）   | 国際共著<br>-               |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>関 正康, 藤沼 康樹, 松島 雅人, 太田 貴子, 小此木 英男, 常喜 達裕, 三浦 靖彦, 大野 岩男 |
| 2. 発表標題<br>「家庭医療ブラッシュアッププログラム」受講者の学習項目の検証                         |
| 3. 学会等名<br>第49回日本医学教育学会大会   |
| 4. 発表年<br>2017年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>関 正康, 藤沼 康樹, 松島 雅人, 小此木 英男, 常喜 達裕, 三浦 靖彦, 大野 岩男 |
| 2. 発表標題<br>「家庭医療ブラッシュアッププログラム」受講者の意識変容の検証                  |
| 3. 学会等名<br>第51回日本医学教育学会大会                                  |
| 4. 発表年<br>2019年  |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|---------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 大野 岩男<br><br>(Ohno Iwao)  |                       |    |

## 6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(研究者番号)                    | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|----------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 三浦 靖彦<br><br>(Miura Yasuhiko)    |                       |    |
| 研究協力者 | 小此木 英男<br><br>(Okonogi Hideo)    |                       |    |
| 研究協力者 | 常喜 達裕<br><br>(Joki Tatuhiro)     |                       |    |
| 研究協力者 | 松島 雅人<br><br>(Matsushima Masato) |                       |    |
| 研究協力者 | 藤沼 康樹<br><br>(Fujinuma Yasuki)   |                       |    |